

日蓮大聖人御書全集

そやどのごへんじ

曾谷殿御返事

りんだおう こと

(輪陀王の事)

新版
1439
〜
1447

そやどのごへんじ りんだおう こと

曾谷殿御返事 (輪陀王の事)

こうあん ねん がつ にち さい そやどうそう

弘安 2 年 ('79) 8 月 17 日 58 歳 曾谷道宗

や ごめにたわら た お
焼き米二俵、給び畢わんぬ。

こめ すこ おぼ そうら ひと じゆみよう つ

米は少しと思しめし候えども、人の寿命を継ぐものに

そうろう いのち さんぜんだいせんせかい か もの そうろう

て候。命をば、三千大千世界にても買わぬ物にて候と、

ほとけ と たま こめ いのち つ もの たと こめ あぶら

仏は説かせ給えり。米は命を継ぐ物なり。譬えば、米は油

いのち ともしび ほけきよう ともしび

のごとく、命は灯のごとし。法華経は灯のごとく、

ぎようじや あぶら だんな あぶら ぎようじや ともしび

行者は油のごとし。檀那は油のごとく、行者は灯の

ごとし。

いっさい ひやくみ なか にゆうみ もう うし にゆうだいいち

一切の百味の中には、乳味と申して牛の乳第一なり。

ねはんぎよう しち い しょみ なか にゆう もつと だいいち

涅槃経の七に云わく「なお諸味の中に乳は最もこれ第一

うんぬん にゆうみ 煎 らくみ

なるがごとし」云々。乳味をせんずれば酪味となる。酪味を

ないしだいごみ だいごみ ごみ なか だいいち

せんずれば、乃至醍醐味となる。醍醐味は五味の中の第一な

ほうもん ごみ 譬 じゆか さんぜん げどう

り。法門をもつて五味にたとえば、儒家の三千、外道の

じゆうはちだいぎよう しゆみ あごんきよう だいごみ あごんきよう

十八大経は衆味のごとし。阿含経は醍醐味なり。阿含経は

にゆうみ かんぎようとう いっさい ほうどうぶ きよう らくみ

乳味のごとく、観経等の一切の方等部の経は酪味のごと

いっさい はんにやきよう しようそみ けごんぎよう じゆくそみ わりようぎきよう

し。一切の般若経は生蘇味、華嚴経は熟蘇味、無量義経と

ほけきよう ねはんぎよう だいご ねはんぎよう だいご

法華経と涅槃経とは醍醐のごとし。また涅槃経は醍醐のご

ほけきょう ごみ しゆ みようらくだいしい

とし、法華経は五味の主のごとし。妙楽大師云わく「もし

きょうし ろん ほっけ かいごん けんのん きょう

教旨を論ぜば、法華はただ開権・顕遠のみをもつて教の

しょうしゆ ひと みよう な う ところ あ うんぬん

正主となす。独り妙の名を得。意ここに在り」云々。ま

い ゆえ し ほっけ だいご しょうしゆ

た云わく「故に知んぬ、法華はこれ醍醐の正主なることを」

とううんぬん しやく まさ ほけきょう ごみ なか

等云々。この釈は、正しく法華経は五味の中にはあらず。

しやく こころ ごみ じゆみよう 養 じゆみよう ごみ しゆ

この釈の心は、五味は寿命をやしなう、寿命は五味の主

なり。

てんだいしゆう ふた こころ いち けごん ほうどう ほんにや

天台宗には二つの意あり。一には、華嚴・方等・般若・

ねはん ほっけ おな だいごみ しやく こころ にぜん

涅槃・法華は、同じく醍醐味なり。この釈の心は、爾前と

ほつけ

そうじ

似

せけん

がくしやとう

すじ

し

法華とを相似せるにいたり。世間の学者等、この筋のみを知

ほけきよう

ごみ

しゆ

もう

ほうもん

めいわく

つて、法華経は五味の主と申す法門に迷惑せるゆえに、

しよしゆう

誑

かい

みかいこと

おな

諸宗にたぼらかさるるなり。「開・未開異なれども、同じ

えん

うんぬん

しやくもん

こころ

しよきよう

ごみ

く円なり」と云々。これは迹門の心なり。「諸経は五味、

ほけきよう

ごみ

しゆ

もう

ほうもん

ほんもん

ほうもん

法華経は五味の主」と申す法門は、本門の法門なり。この

ほうもん

てんだい

みようらく

か

たま

そうら

ふんみよう

法門は、天台・妙楽ほぼ書かせ給い候えども、分明なら

がくしや

ぞんち

ざるあいだ、学者の存知すくなし。

しやく

きようし

ろん

書

そうろう

ほけきよう

この釈に「もし教旨を論ぜば」とかかれて候は、法華経

だいまく

きようし

そうろう

かいごん

もう

ごじ

の題目を「教旨」とはかかれて候。「開権」と申すは、五字

なか け いちじ けんのん せうろう ごとじ
の中の「華」の一字なり。「顕遠」とかかれて候は、五字の

なか れん いちじ ひと みよう な う せうろう
中の「蓮」の一字なり。「独り妙の名を得」とかかれて候

みよう いちじ ころ あ せうろう
は、「妙」の一字なり。「意ここに在り」とかかれて候は、

ほけきよう いちだい ころ もう だいもく せうろう
法華経を一代の意と申すは題目なりとかかれて候ぞ。こ

し ほけきよう だいもく いっさいきよう たましい
れをもつて知るべし、法華経の題目は一切経の神、

いっさいきよう がんもく
一切経の眼目なり。

だいにちきようとう いっさいきよう ほけきよう かいげんくよう
大日経等の一切経をば法華経にてこそ開眼供養すべき

だいにちきようとう いっさい いくえ ほとけ かいげん せうら
ところに、大日経等をもつて一切の木画の仏を開眼し候

にほんこく いっさい じとう ぶつぞうとう かたち ほとけ に
えば、日本国の一切の寺塔の仏像等、形は仏に似たれど

こころ ほとけ

くかい しゅじょう こころ

ぐち もの

も、心は仏にあらず、九界の衆生の心なり。愚癡の者を

ちしや

はじ

くに

費

い

智者とすること、これより生まれり。国のついでのみ入つ

いの

かえ

ほとけへん

ま

き

こくしゅ

て祈りとならず。還つて仏變じて魔となり鬼となり国主

ないしばんみん

煩

いま ほけきよう

ぎようじゃ

だんな

乃至万民をわずらわす、これなり。今、法華經の行者と檀那

しゅつたい

ゆえ

ひやくじゆう

ししおう

厭

そうもく

かんぷう

との出来する故に、百獣の師子王をいとい、草木の寒風

恐

置

をおそるるがごとし。これはしばらくおく。

ほけきよう

なにゆえ

しよきよう

すぐ

いっさいしゅじょう

もち

法華經は何故ぞ諸經に勝れて一切衆生のために用いる

もう

たと

そうもく

だいち

はは

こくう

ことなるぞと申すに、譬えば、草木は大地を母とし、虚空を

ちち

かんう

じき

かぜ

たましい

にちがつ

乳

母

父とし、甘雨を食とし、風を魂とし、日月をめのととし

しょうちよう

はな咲

み生

いっさいしゆじよう

じつそう

て生長し、花さき菓なるがごとく、一切衆生は実相を

だいち

むそう

こくう

いちじよう

かんう

いこんとうだいいち

大地とし、無相を虚空とし、一乗を甘雨とし、已今当第一

ことば

おおかげ

じようえりきしようこん

にちがつ

みようかく

くどく

の言を大風とし、定慧力莊嚴を日月として妙覚の功德を

しょうちよう

だいじだいひ

はな

あんらくぶつか

み

いっさい

生長し、大慈大悲の花さかせ、安樂仏果の菓なつて、一切

しゆじよう

やしな

たも

衆生を養い給う。

いっさいしゆじよう

しよく

じゆみよう

たも

じき

たすう

一切衆生、また食するによりて寿命を持つ。食に多数

ど しょうく

みず

しよく

ひ

しよく

かぜ

しよく

しゆじよう

あり。土を食し、水を食し、火を食し、風を食する衆生

ぐら

もう

むし

かぜ

しよく

颯

鼠

もう

むし

もあり。求羅と申す虫は風を食す。うぐるもちと申す虫は

ど しょうく

ひと

ひにく

こつずいとう

しよく

きじん

にようふん

土を食す。人の皮肉・骨髓等を食する鬼神もあり。尿糞

とう しょく きじん じゆみよう しょく きじん こえ

等を食する鬼神もあり。寿命を食する鬼神もあり。声を

しょく きじん いし しょく 魚 鉄 しょく

食する鬼神もあり。石を食するいお、くろがねを食する

摸 ちじん てんじん りゆうじん にちがつ たいしやく だいぼんのう にじよう

ばくもあり。地神・天神・竜神・日月・帝釈・大梵王・二乗・

ぼさつ ほとけ ぶつぼう 嘗 み たましい たも

菩薩・仏は仏法をなめて身とし、魂とし給う。

れい ないおう かこ りんだおう もう だいおう

例せば、乃往過去に輪陀王と申す大王ましましき。

いちえんぶだい しゆ けんおう おう 何 もの くご

一閻浮提の主なり、賢王なり。この王はなに物をか供御と

たも もう はくば な こえ 聞 み しょうちよう

し給うと申せば、白馬の鳴く声をきこしめして、身も生長

しんしん あんのん 世 保 たも 例 かま もう

し身心も安穩にして、よをたもち給う。れいせば、蝦蟇と申

むし はは 鳴 こえ き しょうちよう あき 萩

す虫の、母のなく声を聞いて生長するがごとし。秋のはぎ

鹿はななはな 咲はな 象ぞう牙げ草そうのこえいかずちのこえ声

にはらみ、孕 柘榴ざくろの石いしにおうてさかうるがことし。

されば、この王おう、白馬はくばをおおくあつめてかわせ給う。ま

た、この白馬はくばは白鳥はくちようを見てなく馬うまなれば、おおくの白鳥はくちようを

あつめ給いしかば、我わが身みの安あん穩のんなるのみならず、百官ひやつかん

万乗ばんじようもさかえ、天下てんかも風雨ふうう時ときにしたがい、他国たこくもこうべを

かたぶけてすねんすごし給うに、まつりごとのそういにや

はんべりけん、また宿業しゆくごうによつつて果報かほうやん尽つきけん、千万せんまんの

白鳥はくちよう一いち時じにうせしかば、また無量むりようの白馬はくばもなくことやみぬ。

だにおう

はくば

こえ

聞

大王は白馬の声をきかざりしゆえに、花のしぼめるがごと

つき

蝕

おんみ

いろ

ちから

く、月のしよくするがごとく、御身の色かわり、力よわく、

ろっこん

濛

々

耄

后

六根もうもうとしてほれたるがごとくありしかば、きさき

濛々

たま

ひやつかんばんじよう

ももうもうしくならせ給い、百官万乗もいかんがせんと

歎

てん

曇

ち

震

おおかせ

旱

魃

なげき、天もくもり、地もふるい、大風・かんばちし、

飢渴

疫

病

ひと

し

にく

塚

ほね

けかち・やくびように人の死すること、肉はつか、骨は

瓦

見

たこく

襲

きた

かわらとみえしかば、他国よりもおそい来れり。

とき だにおう

歎

たま

詮

この時、大王いかんがせんとなげき給いしほどに、せんず

ぶっしん

祈

くに

るところは仏神にいのるにはしくべからず。この国に、も

げどう 多

くにぐに

塞

ぶつぽう

とより外道おおく国々をふさげり。また仏法というものを

多 崇 置

くに だいじ

おおくあがめおきて国の大事とす。いずれにてもあれ、

はくちよう

出

はくば

鳴

ほう

げどう

白鳥をいだして白馬をなかせん法をあがむべし。まず外道

ほう

仰

付

すうじつ

行

はくちよういつびき

の法におおせつけて、数日おこなわせけれども、白鳥一疋

出

来

はくば

鳴

とき

げどう

祈

もいでこず、白馬もなくことなし。この時、外道のいのり

止

ぶつきよう

仰

付

とき

めみようぼさつ

をとどめて、仏教におおせつけられけり。その時、馬鳴菩薩

もう

しょうそういちにん

召

出

そう

宣

と申す小僧一人あり。めしいだされければ、この僧のたま

こくちゆう

げどう

じゃほう

止

ぶつぽう

ぐつう

たも

わく「国中に外道の邪法をとどめて仏法を弘通し給うべく

うま

鳴

易

ちよくせん

い

仰

ば、馬をなかせんことやすし」といふ。勅宣に云わく「お

せのごとくなくなるべし」と。その時に馬鳴菩薩、二世十方の仏

祈請 もつ とき めみようぼさつ さんぜじつぼう ほとけ
はくば はくちようしゅつたい

にきしようし申せしかば、たちまちに白鳥出来せり。白馬

はくちよう み ひと 声 鳴 だいおう うま こえ ひと 聞

は白鳥を見て一こえなきけり。大王、馬の声を一こえきこ

まなこ ひら たも はくちよう ないしひやくせん

しめして、眼を開き給う。白鳥二ひき、乃至百千いでき

ひやくせん はくばいちじ よろこ だいおう おん

たりければ、百千の白馬一時に悦びなきけり。大王の御

色 直 にっ 蝕 本 復 み

いろなおること、日しよくのほんにふくするがごとし。身の

ちから こころ 計 ごと さきさき ひやくせんまん 倍 超 后

力、心のはかり事、先々には百千万ばいこえたり。きさき

喜 だいじん くぎよう 勇 ばんみん 掌

もよろこび、大臣・公卿いさみて、万民もたなごころをあ

たこく 頭 傾 そうろう

わせ、他国もこうべをかたぶけたりとみえて候。

いま 世

違

てんじんしちだい

ちじん

今のよも、またこれにたがうべからず。天神七代・地神

ごだい いじようじゆうにだい じようこう

せんぜ

戒 力

ふくりき

五代、已上十二代は成劫のごとし。先世のかいりきと福力

こんじよう

励

くに

治

ひと

とによつて、今生のはげみなければ、国もおさまり、人

じゆみよう

なが

にんのう

代

にじゆうくだい

せんぜ

の寿命も長し。人王のよとなりて二十九代があいだは先世

戒 力

少

弱

こんじよう

政

果

無

のかいりきもすこしよわく、今生のまつりごともはかなか

くに

漸

さんさいしちなん起

りしかば、国にようやく三災七難おこりはじめたり。なお、

漢 土

さんこうごてい

よ

治

書

渡

かんどより三皇五帝の世をおさむべきふみわたりしかば、

かみ

崇

くに

さいなん

鎮

それをもつて神をあがめて国の災難をしずむ。

にんのうだいさんじゆうだいきんめいてんのう

よ

くに

せんぜ

戒

人王第三十代欽明天皇の世となりて、国には先世のかい

福 薄 強 盛 多 少 善心

ふくうすく、悪心ごうじょうのもののおおく出で来て、善心

愚 賢 賢 教 浅 罪

おろかに悪心はかしこし。外典のおしえはあさし、つみも

重 げてん捨 ないてん 例

おもきゆえに、外典すてられ内典になりしなり。れいせば、

守 屋 にはほん てんじんしちだい ちじんごだい あいだ ももやそがみ 崇

もりやは日本の天神七代・地神五代が間の百人十神をあが

ぶつきよう 弘 げてん

めたてまつりて、仏教をひろめずしてもとの外典となさん

祈 しょうとくだいし きようしゆしやくそん ごほんぞん

といのりき。聖徳太子は教主釈尊を御本尊として、

ほけきよう いっさいきよう 文 書 りようほう 勝 負

法華経・一切経をもんじよとして両方のしようぶありし

かみ 負 ほとけ 勝 たま しんこく 初

に、ついには、神はまけ仏はかたせ給いて、神国はじめて

ぶつこく てんじく かんど れい いま さんがい

仏国となりぬ。天竺・漢土の例のごとし。「今この三界は、

みな わ う きょうもん 顕 たも ついで
皆これ我が有なり」の経文あらわれさせ給うべき序なり。

欽明より桓武にいたるまで、二十よ代・二百六十余年が

間、仏を大王とし神を臣として世をおさめ給いしに、

仏教はすぐれ神はおとりたりしかども、いまだよおさまる

ことなし。いかなることにやとうたがわしかりしほどに、桓

武の御宇に伝教大師と申す聖人出来して、勘えて云わ

く「神はまけ仏はかたせ給いぬ。仏は大王、神は臣かな

れば、上下あいついでれいぎただしければ国中おさまるべ

しとおもうに、国のしづかならざることふしんなるゆえに

いっさいきよう

勘

そらら

どうり

そらら

ぶつきよう

一切経をかんがえて候えば、道理にて候いけるぞ。仏教

大

失

いっさいきよう

なか

ほけきよう

もう

におおきなるとがありけり。一切経の中に法華経と申す

だいおう

けこんぎよう

だいぼんきよう

じんみつぎよう

あごんきよう

大王おわします。ついで華嚴経・大品経・深密経・阿含経

とう

しん

くらひ

侍

位

等は、あるいは臣の位、あるいはさぶらいのくらい、ある

民

くらひ

はんにやきよう

ほけきよう

いはたみの位なりけるを、あるいは般若経は法華経には

勝

さんろんしゆう

じんみつぎよう

ほけきよう

すぐれたり 〈三論宗〉、あるいは深密経は法華経にすぐれ

ほつそうしゆう

けこんぎよう

ほけきよう

たり 〈法相宗〉、あるいは華嚴経は法華経にすぐれたり

けこんしゆう

りっしゆう

しよしゆう

はは

もう

〈華嚴宗〉、あるいは律宗は諸宗の母なりなんど申して、

いちにん

ほけきよう

ぎようじや

せけん

ほけきよう

どくじゆ

一人として法華経の行者なし。世間に法華経を読誦するは、

かえ 痴

失

てん 怒

還かえつておこ痴づき、うしな失うなり。これによつて、天てんもいかり、

しゅご

ぜんじん

ちから

うんぬん

ほけきよう

讚

守護の善神も力よわし」云々。いわゆる「法華経をほむと

かえ

ほつけ

こころ

殺

とううんぬん

いえども、返つて法華の心をころす」等云々。

なんとしちだいじ

じゅうごだいじ

にほんこくじゅう

しよじしよさん

しよそうとう

南都七大寺・十五大寺、日本国中の諸寺諸山の諸僧等、

聞

大

怒

てんじく

だいてん

かんど

このことばをききておおきにいかり、「天竺の大天、漢土の

どうし

わ

くに

しゅつたい

さいちよう

もう

こぼうし

道士、我が国に出来せり。いわゆる最澄と申す小法師こ

詮

い

合

ところ

頭

れなり。せん詮ずるところは、行きあわいんずる処合にてかとしこら

破

肩

切

落

打

罵

もう

をわれ、かたをきれ、おとせ、うて、のれ」と申せしかど

かんむてんのう

もう

けんおう

尋

明

ろくしゅう

僻

ごと

も、桓武天皇と申す賢王たずねあきらめて、六宗はひが事

なりけりとして、初めてひえい山をこんりゆうして天台てんだい

ほつけしゆう

定

置

えんどん

かい

こんりゆう

たも

法華宗とさだめおかせ、円頓の戒を建立し給うのみならず、

しちだいじ

じゆうごだいじ

ろくしゆう

うえ

ほつけしゆう

添

置

七大寺・十五大寺の六宗の上に法華宗をそえおかる。せん

ろくしゆう

ほけきよう

ほうべん

例

ずるところ、六宗を法華経の方便となされしなり。れいせ

かみ

ほとけ

負

もん

守

にほんこく

ば、神の仏にまけて門まぼりとなりしがごとし。日本国も

ほつけさいだいいち

きようもん

はじ

またまたかくのごとし。「法華最第一」の経文、初めてこ

くに

あらわ

たま

よ

いちにん

ほけきよう

の国に顕れ給い、「能くひそかに一人のためにも、法華経を

と

によらい

つか

はじ

くに

い

たま

かんむ

説かば」の如来の使い、初めてこの国に入り給いぬ。桓武・

へいぜい

さが

さんだい

にじゆうよねん

あいだ

にほんいつしゆうみなほけきよう

平城・嵯峨の三代、二十余年が間は、日本一州皆法華経の

ぎようじや

行者なり。

せんだん

いらん

しゃくそん

だいば

でんぎよう

しかれば、梅檀には伊蘭、釈尊には提婆のごとく、伝教

だいし

どうじ

こうぼうだいし

もう

しょうにんしゅつげん

かんど

渡

大師と同時に弘法大師と申す聖人出現せり。漢土にわた

だいにちきよう

しんごんしゅう

習

にほんこく

りて大日経・真言宗をならい、日本国にわたりてありし

でんぎようだいし

ごぞんしょう

おんどき

甚

ほけきよう

かども、伝教大師の御存生の御時はいとう法華経に

だいにちきよう

勝

言

でんぎよう

大日経すぐれたりといふことはいわざりけるが、伝教

だいし

い

こうにんじゅうさんねんろくがつよつか

隠

たま

大師、去ぬる弘仁十三年六月四日にかくれさせ給いてのち、

隙 得

思

こうぼうだいし

い

こうにんじゅうしねん

ひまをえたりとやおもいけん、弘法大師、去ぬる弘仁十四年

しょうがつじゅうくにち

しんごんだいいち

けごんだいに

ほつけだいさん

ほけきよう

正月十九日に、真言第一・華嚴第二・法華第三、法華経は

けろん ほう むみやう へんいき てんだいしゆうとう ぬすびと もう しよう

戲論の法、無明の辺域、天台宗等は盗人なりなんと申す書

さが こうてい もう 掠

どもをつくりて、嗟峨の皇帝を申しかすめたてまつりて、

しちしゆう しんごんしゆう もう 加 しちしゆう ほうべん しんごんしゆう

七宗に真言宗を申しくわえて、七宗を方便とし、真言宗

しんじつ もう た お

は真実なりと申し立て畢わんぬ。

のち にほんいつしゆう ひと しんごんしゆう うえ のち

その後、日本一州の人ごとに真言宗になりし上、その後

でんぎようだいし みでし じかく もう ひと かんど

また、伝教大師の御弟子・慈覚と申す人、漢土にわたりて、

てんだい しんごん にしゆう おうぎ 極 きちよう ひと

天台・真言の二宗の奥義をきわめて帰朝す。この人、

こんごうちようきよう そしつじきよう にぶ しょ 造 ぜんとういん もう

金剛頂経・蘇悉地経の二部の疏をつくりて、前唐院と申す

てら えいざん もう た お だいにちきようだいいち

寺を叡山に申し立て畢わんぬ。これには大日経第一・

ほけきようだいに

なか こうぼう

かごん 数

法華経第二、その中に弘法のごとくなる過言かずうべから

先々

少々

お

ず。せんぜんに、しようしよう申し畢わんぬ。

ちしようだいし

だいし

後

継

園

城

じ

智証大師、またこの大師のあとをついで、おんじよう寺に

ぐつう

当時

てら

くに

禍

見

てら

弘通せり。とうじ、寺とて国のわざわいとみゆる寺これな

えいざん

さんぜんにん

じかく

ちしよう

しんごん

り。叡山の三千人は、慈覚・智証おわせずば、真言すぐれ

もう

用

ひと

えんにんだいし

いっさい

たりと申すをばもちいぬ人もありなん。円仁大師に一切の

しよにん

口

塞

こころ

証

出

諸人くちをふさがれ、心をたばらかされて、ことばをいだ

ひと

おうしん

ご帰依

でんぎよう

こうぼう

ちようか

見

す人なし。王臣の御きえもまた伝教・弘法にも超過してみ

そうち

叡ざん

しちじ

にほんいっしゆういちどう

ほけきよう

え候えは、えい山、七寺、日本一州一同に「法華経は

だいにちきよう

劣

うんぬん

ほけきよう

ぐつう

てらでら

しんごん

大日経におとり」と云々。法華経の弘通の寺々ごとに真言

広

ほけきよう

頭

ひろまりて法華経のかしらとなれり。かくのごとくして、

しひやくよねん

そつら

じゃけん

すでに四百余年になり候いぬ。ようやくこの邪見

増 長

はちじゆういちないしご

失

ぶつぼう

ぞうじようして、八十一乃至五の五王、すでにうせぬ。仏法

おうぼう

尽 お

うせしかば、王法すでにつき畢わんぬ。

ぜんしゆう

もう

だいじゃほう

ねんぶつしゆう

もう

しようじゃほう

あまつさえ、禅宗と申す大邪法、念仏宗と申す小邪法、

しんごん

もう

だいあくほう

あくしゆう

鼻

いっごく

盛

真言と申す大悪法、この悪宗、はなをならべて一国にさか

てんしようだいじん

魂

失

氏

子

守

んなり。天照太神はたましいをうしなつてうじこをまぼら

はちまんだいぼさつ

いりき

くに

しゆご

結

句

ず、八幡大菩薩は威力よわくして国を守護せず、けつくは

たこく もの

にちれん

由 み

ぶつぼう

他国の物とならんとす。日蓮このよしを見るゆえに、「仏法

なか あだ

じごく

お

とう

責

恐

の中の怨」「ともに地獄に堕ちん」等のせめをおそれてほぼ

こくしゆ 示

じゃぎ

誑

しん

たも

国主にしめせども、かれらが邪義にたぼらかされて信じ給

かえ

だいおんてき

たま

うことなし。還つて大怨敵となり給いぬ。

ほげきよう

失

ひと

こくちゆう

じゆうまん

もう

ひと知

法華経をうしなう人、国中に充滿せりと申せども、人し

愚癡

失

いま

ることなければ、ただぐちのとがばかりにてあること。今は

ほげきよう

ぎようじゃしゆつたい

にほんこく

ひとびと

おろ

うえ

また法華経の行者出来せり。日本国の人々、癡かの上に

瞋

起

じゃほう

愛

しょうほう

憎

さんどく

いかりをおこす。邪法をあいし、正法をにくむ。三毒

強 盛

いつこく

あんのん

えこう

とき

だい

ごうじようなる一國、いかでか安穩なるべき。壞劫の時は大

さんさい 起

かさい すいさい ふうさい

げんこう

の三災おこる。いわゆる火災・水災・風災なり。また滅劫の

とき しょう さんさい

けかち えきびよう かつせん

けかち

時は小の三災おこる。ゆわゆる飢渴・疫病・合戦なり。飢渴

だいとん 起

疫 病 愚癡

かつせん

は大貪よりおこり、やくびようはぐちよりおこり、合戦は

しんに

いま にほんこく

ひとびとしじゅうくおくくまんしせん

瞋恚よりおこる。今、日本国の人々四十九億九万四千

はつぴやくにじゅうはちにん

なんによ ひとびと 異

おな ひと

八百二十八人の男女、人々ことなれども、同じく一つの

さんどく

なんみようほうれんげきよう きよう

起

三毒なり。いわゆる、南無妙法蓮華経を境としておこれる

さんどく

ひと

しゃか たほう じつぼう しょぶつ いちじ

罵

三毒なれば、人ごとに、釈迦・多宝・十方の諸仏を一時にの

責

なが

失

すなわ

しょう

さんさい

ついで

り、せめ、流しうしなうなり。これ即ち小の三災の序な

り。

にちれん いち 類

かこ しゆく 習

しかるに、日蓮が一のい、いかなる過去の宿じゆうにや、

ほけきよう だいもく 檀 那 たも 思

法華経の題目のだんなとなり給うらん。これをもつておぼ

いま ぼんてん たいしゃく にちがつ してん てんしやうだいじん はちまんたいぼさつ

しめせ、今、梵天・帝釈・日月・四天、天照太神・八幡大菩薩、

にほんこく さんぜんいつびやくさんじゆうにしゃ だいしやう 神 祇 かこ

日本国の三千一百三十二社の大小のじんぎは、過去の

りんだおう はくば にちれん はくちやう われ いちもん

輪陀王のごとし。白馬は日蓮なり。白鳥は我らが一門なり。

はくば 鳴 われ なんみやうほうれんげきやう こえ

白馬のなくは我らが南無妙法蓮華経のこえなり。この声を

たも ぼんてん たいしゃく にちがつ してんとう いろ 増

きかせ給う梵天・帝釈・日月・四天等、いかでか色をまし

光 盛 たま われ しゆくこ

ひかりをさかんになし給わざるべき、いかでか我らを守護

たま 強 々 思

し給わざるべきと、つよづよとおぼしめすべし。

きへん い きんがつ ごぶつじ がもく しゆあ
そもそも、貴辺の去ぬる三月の御仏事に鵝目その数有り

ことしいつびやく余にん ひと さんちゆう 養 じゆうにとき

しかば、今年一百よ人の人を山中にやしないで、十二時の

ほけきよう 読 だんぎ そうろう まつだいあくせ

法華経をよましめ、談義して候ぞ。これらは末代悪世に

闇 浮 提 だいいち ぶつじ そうら 幾

は一えんぶだい第一の仏事にてこそ候え。いくそばくか

かこ しょうりよう 嬉 思 しゃくそん こうよう ひと

過去の聖霊もうれしくおぼすらん。釈尊は孝養の人を

せそん 名 たま きへん せそん

世尊となづけ給えり。貴辺あに世尊にあらずや。

こだいしんのあじやり 歎 せうら

故大進阿闍梨のことなげかしく候えども、これまた

ほけきよう るふ しゆつたい 因 縁 そうろう

法華経の流布の出来すべきいんえんにてや候らんと

思 ことごと いのち 永 ときむかう

おぼしめすべし。事々、命ながらえば、その時申すべし。

こうあんねんつちのとうはちがつじゅうしちにち
弘安二年己卯八月十七日

そやどうそうごへんじ

曾谷道宗御返事

にちれん
日蓮

かおう
花押